

また久しく原始的な第一次産業にとどまっていた北海道が、工業に進出しはじめたのは本期間である。たゞ日高は前記のような交通条件の不利によつて工業の発達には遅々たるものがあり、この間僅かに合板工業が若干おこつたにすぎず、昭和九年幌満川にはじめて水力発電所ができ、ついで類似にマンガン鉄の精煉所ができたことは特記すべきことであつた。豊富な水力も眠れるままであり、本道未開発地下資源の七〇%を埋蔵すると推定される鉱物も深い限りをむさぼつてゐる。ただ大正の初期から沙流川沿岸のクロム礦は後藤彦三郎、八田満次郎等の先覚者によつて開発され、本邦の主産地となつてゐることは力強い限りである。

次に文化の後進性は、中等教育の恵まれなかつたことに端的に表現される。やがて首邑浦河に庁立女学校が設置され、昭和十一年には静内農業学校が開校された。小学校も日高山脈の西斜面を流れる各河川の狭長な低地を地域社会とするために単級複式校が多く、いわゆる僻地学校としてすべての点で恵まれていない。されば昭和二十六年北海道立教育研究所が「小さい学校」の事態を把握するモデル地区として、日高を選定したのも当然のことであつた。

日高の開発をはばむ諸条件は年をかさねるに従つて取除かれ、他の支庁に比して甚だしく後進的ではあるが、日に日に向上線を迎つてゐる。これは歴代支庁理事者の熱意と町村長を中心とする住民ならびに管内代表の選良などの不断の努力とが、その推進力となつてゐるといつてよい。今や日高開発期成会は管内の衆智をあつめて日高地方総合開発の構想をねり、その基礎を樹立しようとする一方、北海道総合開発委員会は委員を派して日高の実態調査を行い計画の妥当性を確立しようとしている。また北海道開発局は、日高特定地域の奥地林開発調査報告書を上梓し、水力の開発については、開発局或は北海水力電気会社が雄大な構想をすすめんとする態勢にある。なお待望の日勝線工事の再開も近きにあるものと考えられる。

世人は口を開けば、日高の開発の古いことを言わないものではなく、またその気候と景観に恵まれてゐることを讀まないものはない。しかし、時には日高住民の開発意欲の低調を指摘したものもないではないが、この点については日高開発史を繙けば、先人は決して拱手してゐたわけではなく、事実深くましい努力を郷土の開発に注いでいたことが強く認められるのである。

## 二 行政上の諸問題

### 1 歴代の支庁長

明治四十二年西忠義が小樽支庁長に転じて村本初太郎が着任したが、僅か半年で河西支庁に去り、その後を襲つた川越常次郎は四年五ヶ月間在職した。ついで関崎不二夫となり、関崎は大正六年(在任三年)網走支庁長に転じた。大正八年新築された支庁舎は関崎の力にまつことが多い。それより、那須正夫(二年九ヶ月在職)近藤喜寛(十ヶ月)を経て大正十年空知支庁長一課長の高井高次郎が支庁長として来任した。高井は最も企画性に富み、多くの仕事を残して十三年十二月在任三年八ヶ月にして留朋支庁長に転じ、吉田正一の来任をみた。吉田は第二期拓殖計画樹立のために努力し、ついで茶谷幸一が来任、続いて守屋葵清が釧路支庁長より転任し来り、一年半にして石狩支庁長に転じた。守屋の後任の森本正雄は守屋と同じく一年半ばかりで檜山に転じ、道庁開墾課首席の永山政能が日高支庁長となつた。永山は専ら産業組合の育成につとめてその熱意が認められ、昭和八年末道庁産業組合課長に転じた。浦河支庁を日高支庁と改めたのは永山支庁長のときであつたが、永山の後には本庁の産殖課長前田豊次郎が来た。これは全くの入れ替え入事で、前田は三年間日高の行政にあたつた。昭和二年度より実施した第二期拓殖計画は、この頃すでに八箇年を経過し冷害凶作のりこえて、鉄道の敷設、浦河築港の完成、黄金道路の全通などが同支庁長の任期中に実を結び、日高の一躍進期を画したのであつた。しかし一方十年九月静内一帯を襲つた津浪によつて、之が救護にもつとめなければならなかつた。前田去り温厚なる野々瀬恵一郎、日本精神をふりかざした時局的な織田信知、戦雲急なる最中は古縁裕が支庁長として経営に苦闘し、短期間ではあつたが大塩礼、吉田栄吉がつづいてその任にあたり、終戦の混乱期に当面した。やがて土橋武士、佐々木茂一がそのあとをついたが、土橋は開拓民

の導入に つとめ 佐々木は畜産に詳しく 本地方の畜産問題、開拓問題に尽力し、また十勝沖地震の事態拾収に堅実な手腕を發揮した。

## 2 町 村 行 政

右左府村は大正八年四月、平取村八ヶ村戸長役場地域より分村して同村戸長役場をおいた。大正十年平取村と境界を変更し、十二年戸長制廃止と共に北海道二級町村制を施行した。昭和十八年村名を日高村と改め、字名地番の改正を行った。

平取村は明治三十二年門別村より分村し、平取村外八ヶ村戸長役場の管轄にぞくし、大正八年右左府村を分村し、大正十二年二級町村制を施行した。昭和二十七年開村五十年式典をあげ、人口の増加、資源の開発など村勢の發展著しいものがある。

門別町は平取村の母村で、明治十三年より沙流郡各村戸長役場を設置した。はじめ富川にあつたが、のち門別市街地に移した。明治四十二年二級町村となり、昭和四年一級にすゝみ、昭和十一年字名を改正、昭和二十六年町制を施行するに至つた。

新冠村は久しく牧場用地によつてしめられ、耕地も狭小であり、その行政的所屬も屢々変更した。明治十三年静内新冠町戸長役場にぞくし、十四年独立して同村各戸長役場となつたが、二十二年静内に併合、四十年再び分離独立、大正十二年戸長制をやめて二級町村となつた。終戦後牧場用地の開放によつて著しく人口の増加を示すに至つた。

静内町は明治十三年静内新冠町戸長役場にぞくし、四十二年二級町村制をしき、大正十三年一級にすゝみ、全道町村長会長道会議員をつとめた吉田貫一が長く村長として在任した。昭和六年静内町と称し、九年大字名を廃止して新字名を撰定した(それまで市街地を下方とよんだ)。

三石村は明治八年戸長をおき、三十九年二級町村にすゝみ、昭和三年市街字名を改称(それまで市街縞布等と称した)、十一年大字を廃止して十九字を新称し、十三年一級町村となり、二十六年町制を施行するに至つた。

荻伏村は、四十三年浦河村と分離して二級町村制をしき、同年模範村として内務大臣より表彰された。

浦河町は明治十三年戸長役場をおき、三十五年荻伏と共に二級町村となり、四十三年荻伏村を独立させ、大正四年浦河町と称し、

### 二 行政上の諸問題

一五九

### 第四編 新時代への歩み

一六〇

一級町村制を施行、大正四年大字名を改め、昭和十年大字をやめて字名を改称した。

様似町は明治十二年様似村外七ヶ村戸長役場をおき、三十九年二級町村、昭和十六年字名を改正し、昭和二十七年町制を施行した。幌泉村は、明治十三年幌泉外八ヶ村戸長役場を設置、三十九年二級町村制を施行した。

昭和二十二年四月五日地方自治法により町村長の公選が施行された。全道二七三市町村中六四は無競争であつたが、日高における結果は次表の通りであつた。

村名	当選者(得票)	次 点
日高	小滝 正満 七〇四	津田 権栄 五〇六
平取	遠藤 一治 三、一六四	島野 正雄 四九六
門別	松本 末吉 (無競争)	
新冠	十倉十六美 一、〇一四	酒井未太郎 六二七
静内	貝田 信治 一、七五一	二宮 茂樹 一、一二五
三石	広田 時治 一、六四一	菊地 武雄 一、三八九
荻伏	竹内 鼎 九四三	平尾 良治 八六四
浦河	嶋崎 敏雄 一、九四九	佐々木秀雄 一、六四九
様似	留目 四郎 二、一四二	三上 重藏 一、〇五六
幌泉	小西喜代人 (無競争)	
		奥山徳三郎 一、〇九六

### 3 拓殖計画と日高

昭和二年第二期拓殖計画が策定され、昭和二十一年まで全道総額九億六千三百余万円を投じて開発を推進することとなつた。本計

画による殖民事業、産業の奨励、森林の開墾、土地改良、道路橋梁の整備、河川治水、港湾の修築、殖民軌道の敷設、鉄道の助成など、その事業は各章にそれぞれ記述されるが、これによつて多年懸案とされた浦河港は完成し、鉄道省の同情ある理解によつて苫小牧浦河間の鉄道完成が促進され、また高江帯広間の鉄道も予定線に編入された。そして荷負上買気別間七・五哩に殖民軌道が敷かれた。また総工費の二割を地元町村に負担させることとして舟入潤が築成された。黄金道路、右左府村右岸路道の竣成も、管内の多年の宿願を解決するものであった。

昭和九年前田支庁長を中心に、向う五箇年を期して、日高の産業を躍進させようとし、現状を分析して、その漸進方策を樹立した。この日高開発産業五箇年計画は直接予算を伴うものでなく之が裏付けは拓殖費にまたなければならなかつたので、その具体化には脆弱性を含むことは否み難いとしても、一応の指標をあたえる貴重なものであった。

過去五ヶ年に於ける管内の総生産額平均は一千九十万円で、農産三三%、水産四〇%、林産一八・八%、畜産四%、工業三・九%、鉱産〇・四%であったが、向後五ヶ年後には総生産額を一千六百万円に推進し、前記の比率を三一・六%、三一・三%、一三・七%、四・六%、三%、一一・五%、副業三・三%に高めようとしたものである。

農業は水田五千四町歩を六千七百町歩に、畑地一万六千四百町歩を二万一千町歩にすすめ、農家戸数五千四百を六千二百九十二戸にしようとした。

水産は浅海利用、処理加工改善販売の改善沖合漁業の改善等と共に舟入潤を増築し、水産額を二百四十万円より五百万円に引上げようとする。

林産は特殊樹造林、荒廢地造林、天然造林、耕地防風林、屋敷林、海岸防風林等の詳細な計画を定め、また木炭増産の方途をたてた。生産額百二十万円を二百十九万円に増し、資源の保全にも留意した。

畜産においては牧野の集約的利用につとめ、馬と共に牛を増加する。乳牛は西部に、東部海岸台地には肉牛を飼育し、綿羊の増殖を計る。

## 二 行政上の諸問題

## 第四編 新時代への歩み

工業は地理的關係上大工業の勃興を期待し得ないが、木工業水産加工業醸造業を助長するため企業家をまねきまた資源利用調査を行った。

鉱産は八田鉱山が盛大に向いつつあるから将来が期待され、二百万円が生産が見込まれる。

これらの計画ほどの程度まで町村に徹底したかは明らかではないが、之が完成年度である昭和十三年についてみるならば、その総生産額は二千三百万円に達して目標を上廻っている。その二、三を対比すれば、

目	標	実績
水田	六、七〇〇町	五、二〇〇町
畑地	二一、〇〇〇町	一七、八〇〇町
水産	五〇〇万円	一、〇七四万円
林産	二一九万円	四〇七万円
馬	一七、〇〇〇頭	
牛	一、六九七	
工業	五〇万円	六七万円
鉱産	二〇〇万円	一四一万円

のようであつて、金額は別として実質的には予期に達したとは思えない。

## 4 御料地の開放運動

新冠御料牧場は新冠静内の両郡に跨りその面積に多少の異動はあるが、明治三十年には、三八、四四一町余に達し、ために新冠村のごときは高江近傍少面積のみが民有地に過ぎず、住民は御料地の小作をして僅かに生活するにすぎなかつたので、姉去アイヌ人のこ

ときはあげて遙か辺地なる上貫郡に移転するとういうようなこともあつた。比字方面の貸付の一因は、農民の要望ももとよりあつたが、一方開耕して熊書を一掃しようとする目的もあつた（日高開墾功労者事蹟録五六頁）。大正七年比字沢分河移民地はそのよい例であつたが、十一年に引上げられた。また大正五年には前記婦去の移住があつた。

利用上からみても、収益の少ない牧地よりも耕地にするよう一般に要望され、また鉄道延長については後背地の生産力がこれに働かざるを得なければならぬのに、牧地によつてこれが阻害されていることも管内としては不利と考えられた。しかし当時としては皇室御料地に対して積極的に発言することは、一般に遠慮されていたのである。

しかし日高実業協会は、大正六年、遂にこの課題を解決するために渋谷主馬頭に対して牧場用地の一部開放につき請願し、また同年伊藤主馬頭の来道に際しては、協会役員が札幌において陳情した。更に日高各町村会の決議を経て、日高実業協会長堺頼吉名を以て北海道庁長官笠井信一に請願し、また十二年には宮尾長官に、続いて土岐長官という具合に、ついで要路に上申して宮内省當局に伝達方を請願した。しかし事は容易に進展しなかつた。

大正十三年日高実業協会長堺頼吉等は広面積を占める牧場用地の「御常用ニナラザル部分」御貸下ヲ請ヒ、薩馬ノ改善ヲ中心トスル農牧物ヲ組織シ開墾耕作の業をあわせおこして日高の開拓をすすめる富力を増進したい旨を宮内大臣牧野伸顯に陳情した。この時の直接運動については、新冠村長十倉十六美が地元として最も尽力し、手代木隆吉坂東秀太郎等も極力ほん走するところがあつた。

大正十四年三月かさねて之を懇請し、開拓の根幹である鉄道が未だ一度も予定の朱線すら引かれたことのないのは、広漠たる牧場が管内にあるため生産が上がらず運搬輸送の要がすくなくとみられるためであることを力説した。この年更に吉田支庁長はじめ各町村長、協会幹事は連署して、私下牧場地の事業内容を具体的に説明し、責任の所在をもあきらかにして運動をつづけた。

結局この問題は、小作者に対する多少の私下げが行われたのみで、時勢の推移に委す外はなかつたが、費用と時日を惜しまず、また急進的なりとの当局の警戒をおそれず、日高発展のために團結して奮闘したことは永く記憶されなければならない。新冠御料牧場御用地一部貸下請願陳情書写。大正十四年本件に關して協定書に署名したものは次の通りであつた。幌泉村長鹿野約翰、様似村長

## 二 行政上の諸問題

一六三

## 第四編 新時代への歩み

一六四

十倉十六美、浦河町長住谷尚平、萩伏村長菊地貞、三石村長赤尾関泰蔵、静内村長吉田貫一、新冠村長山藤精一、門別村長高木勉、平取村長武田典、右左府村長広瀬円蔵、日高実業協会長堺頼吉。

## 5 門別演習地の問題

門別町富浜シノダイ岬及び競馬場附近七三町歩が、昭和二十六年アメリカ進駐軍の高射砲射撃場及び連絡飛行場として接收された。同年より二十八年末に至るまで約一七〇日間の演習が同地に行われ、さらにわが保安隊も来場して訓練を行ったこともあつた。昭和二十七年四月には、駐留軍より上記七三町歩を含む三、五〇〇町歩を演習予定地として接收すべき申込みが政府になされた。当時は駐留軍ならびに保安隊の防備強化のため各地に軍事基地を増加しつつあつたその一環としてであつた。

前記の地域が演習地となつたため、沿岸一四〇戸の漁民は出漁を妨げられ、また魚族の回遊などの損害が多額に推計され、一面農家も直接少からざる被害を受けたが、これに対する補償は関係民を満足せしめるものではなかつた。さらに市街地におけるサービス業による風紀問題は殊に児童生徒にすくなからぬ悪影響をあたえつつあることが屢々報告された。

本問題に対して門別町当局者は住民とともによく結束して、被害の補償要求及び接收解除のために、穩便にしてしかも忍耐よく誠意を以て関係当局に善処方を要望した。また附近の各学校はその教育的悪影響をすくなくするためにあらゆる方策を講じた。一方日高管下各町村も一体となつて管内の重大問題として解決に協力した。特に当時最も問題となつた石川県内灘村演習地接收反対の運動において、他の急進団体と共同斗争をとつたために、事態を紛糾に導いた事例にかんがみ、全く住民自体の力と自からの生活権よう護そのものために運動を推進することにとめた。

これらの運動は次第に各方面に認められて、道議会において接收反対の決議をみ、また国会に対するはたらきかけも奏功し、日米合同委員会においても日本側の発言が強く、三、五〇〇町歩接收の件は一ヶ年延期された。さらに二十八年末には全面的に之が使用を停止することとなつた。

なお、日高には襟裳岬にアメリカ軍の飛行場とレーダー基地があるだけで、所謂軍事基地は、比較的少い。

## 6 道議会及び国会議員の選挙

道政に活動した人々

大正二年第五期道会議員選挙には浦河の堺頼吉が当選した。堺は父の代より地方の殖産興業に尽力した名望家であり、その在任中鉄道の誘致、築港問題、御料地解放、支庁々舎改築等に巾広い活動を行い、その後もかわることなく地方公共の事に専心した。大正五年には三石の坂東秀太郎が第六期道議会に議席を得た。坂東は父夏治と共に若くして淡路より富沢(幌毛村と云つた)に移住し、夙に青年団活動によつてその手腕を認められ、やがて農会に關係し、憲政会に屬して政治活動に専念することとなつた。記憶力鋭得力にすぐれ彼は特にもつれた事をまとめるに非凡の手腕を有していた。そして七期(大正九)八期(十三年)九期(昭和三)十期(昭和七)十一期(昭和十)と殆んど無競争を以て当選し、昭和十一年には村上元吉のあとを襲つて第十五代議会議長に就任した。更に第十二期(昭和十五)より戦時を経て依然として世望を担い、十三期(昭和二十)にも当選し、議長の重任をはたした。十四期(昭和二十)にも当選したが、当時の政界の事情は彼の議長たることを許さず、之を第十六代議長蒔田令吉に譲つたが、在任十一年十一月道議会史空前の長い議長任期をつとめあげたのである。

第十一期(昭和十)よりは日高管内の定員は二名となり、静内町長吉田貫一が推されて当選した。吉田はすでに全道町村会々長としてその手腕は試験済みで、たちまち議員一方の雄として議員会長に就任した。特に馬政に關して画策するところが多かつた。

第十三期(昭和二十二)よりは、吉田にかわつて門別の国民協同黨員棚川忠雄が農民代表として当選した。棚川は農業実務家であり同村政をリードした精力的な活動家であつて、十四期(昭和二十六)にも再選された。

昭和二十一年の新しい選挙

明治三十四年道会法が公布されて、八月に第一回の選挙を行つたが、本道は他府県とその性格を異にし、財政的にも独立性に乏し

### 二 行政上の諸問題

一六五

### 第四編 新時代への歩み

一六六

かつたので道議会も自治行政を担当する部面は稀薄をまぬかれなかつた。昭和二十一年地方自治法の改正に伴い、所謂官治をやめ、新たに他の都府県と同様な民主政治が行われることとなつた。男女とも有権者となり、戦時体制下の反動も手伝つてか、政治熱は未曾有にたかまつた。かくて、戦後最初の道議会議員選挙は昭和二十二年四月卅日を行われた。全道立起者の数は男女八一名におよび、特に秋伏村のアイヌ出身の小川佐助の健斗など、新しい時代への歩みを知るに十分であつた。

#### 二二年施行道議会議員選挙内訳表

当選	坂本秀太郎	得票	一、二、八九一	民主党
同	棚川 忠雄	五、七六六		国協党
	小林 潔	三、六八九		自由党
	小川 佐助	三、四二二		無所属
	十倉十六美	三、三五六		自由党
	竹林龜太郎	二、四一三		社会党
	原田 了介	一、九〇九		共産党
	松田利右衛門	九九三		無所属

#### 国会の人々

大正三年札幌外七支庁旭川管内の衆議院議員選挙は有権者五、九三八名、札幌の金融業五十嵐佐市と新十津川村の中心人物東武とが、その榮を競つたが僅少の差を以て政客東も金力の下に屈した。大正六年は東武が宿望を達し植田重太郎が次点であつた。大正九年の改選には浦河胆振両支庁管内を一区とし室蘭の海運業栗林五朗が当選した。栗林は事業経営に手腕があつたのみでなく、大正二年道議会議長をつとめた経歴を持つていた。

大正十二年には室蘭市は別に一区となり、浦河胆振から伊達出身の手代木隆吉が当選した。手代木は浦河の坂東と協同戦線を張り、確固たる地盤を築いた。そして後には政務次官などの要職についた。以来手代木は管内代表として重んぜられ地方の発展に貢献するところがすくなくかつた。

昭和十二年第四区(室蘭、空知、胆振、日高有権者一二二、三九五)において、岡田春夫、深沢吉平、手代木隆吉、岡本幹輔、南条徳男、東英治、山本市英、赤松克麿、北勝太郎等がそれぞれの背景によつて立起し、混戦をきわめたが、日高においては手代木総票数一〇、五九三の中五、八五三を得て断頭角をあらわし、ついで南条(一、三〇三)北(一、三三八)が有力であり、他は少数であった。結局赤松、手代木、北、岡田、南条の順で五人が当選した。これ普通選挙法施行第一回の記念すべき選挙戦の結果であった。太平洋戦争勃発のため任期が一年延期されて、昭和十七年(全国第二一回本道第一五回)の所謂翼賛選挙が行われた。当選者は次の通りである。

第一区

- 一八、一〇五 山本 厚三 (推翼前) 海運倉庫業 六三才
- 一三、五八四 沢田 利吉 (ノ) 農 業 六四
- 一〇、二四一 安孫子孝次 (推新) 道農会長 六一
- 八、五四七 正木 清 (新) 運送業 四三

第二区

- 一九、二六一 松浦周太郎 (推翼前) 製材業 四七
- 一〇、三三六 吉田貞次郎 (推新) 農 業 五八
- 六、六一三 坂東幸太郎 (推新) 農 業 六二
- 六、三五四 前田善治 (推新) 農 業 五〇

二 行政上の諸問題

第四編 新時代への歩み

第三区

- 一六、九九一 真藤慎太郎 (推新) 会社重役 六〇
- 一五、二五六 大島 寅吉 (推翼前) 会社員 六八
- 一二、六五四 渡辺 泰邦 (推新) 著述業 五二

第四区

- 一九、〇二三 手代木隆吉 (推翼前) 弁護士 五九
- 一八、三二七 北勝太郎 (推前) 農 業 五四
- 一五、八三二 南条 徳男 (推元) 弁護士 四八
- 一五、一〇六 深沢 吉平 (推翼前) 農 業 五八
- 一三、九〇九 星野靖之助 (推新) 会社員 四四

第五区

- 一九、三四三 黒沢 西蔵 (推新) 農 業 五八
- 一九、三三〇 南雲 正朔 (推翼前) 弁護士 四〇
- 一八、五二三 東条 貞 (ノ) 会社員 五八
- 一七、八〇三 奥野小四郎 (推元) 農 業 六三

終戦後憲法の改正にもとずき、新たに婦人も参政権を認められ、また活動の自由を得るに至つた進歩的政党もいち早く人民工作にのりだし、一般の政治的関心は著しく高まつた。昭和二十二年四月一日を期して、新生国家の将来を方向づける衆議院議員(第二二回、本道第一六回)総選挙が施行された。大選挙区制により本道を二区にわかし、日高は札幌函館室蘭夕張岩見沢の六市と石狩渡島檜山後志胆振空知の六支庁管内と共に定員十四名三名連記制であつた。立起した候補者は定員の五倍、七一名に達した。殊に注意を

ひいたのはアイヌ代表として名乗りをあげた鶴川の大河原徳右衛門と、同村の辺泥和郎の両名であつた。開票の結果は次の通りであつた。

#### 昭和二十一年衆議院議員選挙表

当選—有馬 英二	(無 一〇九、八七九)	北勝太郎	(協同 八八、九九四)
新妻 イト	(社会 六九、四一八)	苔米地英俊	(自由 六七、九一九)
平塚常次郎	(自由 六七、六二二)	岡田 春夫	(社会 六〇、〇〇六)
正木 清	(社会 五九、四四六)	権熊 三郎	(政同 五〇、四一九)
地崎宇三郎	(政同 五〇、〇二九)	東 隆	(協同 四八、〇一八)
柄沢とし子	(共産 四四、一四〇)	北 政清	(協同 四四、一四〇)
小川原政信	(自由 四〇、八八〇)	香川 兼吉	(協同 三九、九九〇)
参考 大河原徳右衛門	(自由 五、四二六)	(内日高 一、八四〇)	
辺 泥 和 郎	(無 五、二九九)	(内日高 一、九七五)	

昭和二十二年社会党の提出した吉田内閣不信任案によつて議会は解散し、中選挙区単記制で四月二十五日総選挙が行われ、第四区より岡田春夫、北二郎、三好竹勇、山中日露史、松浦栄が当選した。昭和二十四年一月二十三日の第二四回総選挙が行われ第四区より岡田春夫、北二郎、小平忠、柄沢とし子、篠田弘作らが当選した。日高の総投票数は三一、六九七で次の者は主なる得票者であつた。篠田(五、六〇九) 三好(四、七八八) 徳中祐清(四、二六二) 小平(三、八八八) 北(三、四〇一)。

第二五回総選挙は昭和二十七年十月一日施行、第四区定員五名に対し十名立起、岡田春夫、渡辺物蔵、篠田弘作、山中日露史、南条徳男等が当選し、小平、北勝太郎、手代木隆吉、柄沢等の前歴者は失敗した。

#### 二 行政上の諸問題

一六九

#### 第四編 新時代への歩み

一七〇

昭和二十八年四月十九日吉田首相の失言をめぐつて議会は解散され、第二六回総選挙を施行したが、小平忠、岡田春夫、篠田弘治、山中日露史、南条徳男が当選し社会党の渡辺物蔵は惜敗した。今回における日高の得票分布は次の通りである。

小平(六、三六三) 岡田(二、九二二) 篠田(九、七四四) 山中(五、五七〇) 南条(六、一五〇) 渡辺(四九六) 手代木(八、五五三) 柄沢(二、四二九) 合計四〇、二二四で甚だしい分散傾向を示した。

#### 7 戦時下の日高

昭和十二年七月七日、蘆溝橋における事件を発端として国は自から戦乱の渦中に突入した。既に各町村壮丁は征途にのほり、軍歌、プラスバンド、万歳声裡に駅頭を去り、或は護国の英霊として無言の凱旋をするものを見た。国民精神総動員は当時の実践標語であり、労働運動、思想問題研究、自由主義的言論は禁圧されつつあつた。

昭和十三年に生活の簡素化、ぜい沢の禁止、奉公精神の高揚と共に労務対策農事改良などの戦力増強の方策がとられた。学校においても軍人志願が奨励された(文化の章参照)。

昭和十四、五年には多くの物品に公定価が附され、米は配給制となり必需品は多く切符制をとつた。また軍需生産のため、インフレーションを生じたので貯蓄が強調された。臣道実践のため、十六年七月一日を期して興亜奉公日が定められ、町内会部落会を組織して隣組常会を開くこととなつた。これより先き大政翼賛会が結成され、国会議員もまたそれを母体としての推せん議員となつた。

昭和十六年十二月八日、遂に国際事情は悪化して米英に対し宣戦を布告し、決戦体制に突入することとなつた。国民は一抹の不安を抱きつつも、統制せられた報道機関の勝利のニュースを喜び、当局の指示にしたがつて銃後活動につとめた。

人的資源の不足によつて青壮年は工場炭坑にあいついで出勤し、出征家族のために奉仕し、また食糧補給のために自家耕作が盛んになつた。

服装も男子は戦闘帽、国民服、ゲートル、女子もモンペ、国民服、地下足袋のときをつけ、或は防空頭巾や鉄かぶとを背負つて

他出した。防空壕がほられ、しばしば燈火管制避難訓練消火訓練がくりかえされた。

栄養は次第に低下し、薬品類は欠乏して、国民はあけて窮乏に陥り、法律違反者は減少するどころか、かえっていわゆるヤミが横行して犯罪はむしろ増加するという奇現象を呈するに至った。

昭和十七年四月、米機は中部地区に來襲し、飛行機の増産が夙願最大の目標となつた。金属の回収も日に日に強化されていつた。翼賛壯年団在郷軍人会は悲壯な決意を以て戦意の高揚と沿岸の防備にあたり、兵団も管内近くに進駐してきた。

昭和十八年を過ぎ十九年に入ると、都市における疎開がはじまり、東京空襲を避けて來住する人々も見られるようになった。

そして遂に二十年春には苦小牧沿岸と襟裳方面に米軍の艦砲射撃をうけ、若干の死者を生じた。ことに四月千島より交代のため船途にあつた輸送船が、厚賀沖で撃沈され、夥しい溺死者を出し、附近住民をして暗然たらしめるという悲惨事も発生した。沿岸各地からは敵潜水艦の浮上が見られるようになり、六月に入るとついにB29の來襲をうけ、七月中旬には沿岸一帯にわたつて熾烈なるグラマンF6多数の掃射爆弾投下をうけ、建物の炎上爆破、列車の被弾、人畜の殺傷は多数に上つた。

八月十五日遂に終戦となり、人々は言い知れぬ感慨に慟嘆した。しかし暗い遮光紙は剝がれ、電燈は明るく町や村や部落に輝くようになった。

本道における被害は大体次の如くであつた。

◎北海道太平洋戦争被害表（第一四日本統計年鑑、内閣）

488	234	188	5	875	387	105	57	15	564
死	傷	傷	不明	計	死	傷	傷	不明	計
重	重	重	衛		重	重	重	衛	
行	行	行	行		行	行	行	行	
空襲					艦砲射撃その他				

二 行政上の諸問題

### 三 人口の増加

#### 1 総人口増加のあと

大正元年における日高の総人口は三万九千人であつたが、年間一千人程度の増加を示して大正十年頃に及んだが、それからの数年は一進一退という状態で、ただ大正十四年の四千五百人に及ぶ一年をはさんで人口カーブはむしろ下りざかとなつた。だが昭和五年から再び増加の傾向を示して、昭和十年には八千人の大増加を示した。しかし再度戦時下の日高は人的資源の流出によつて人口は減少または停頓を示したが、それでも昭和十八年には大正元年人口の約二倍七万八千に達した。これは実に三十一年目のことである。北海道人口が大正元年の二倍に達したのもほぼ同年で、北海道人口増加のあゆみと日高のそれとは相似ているのは興味のあることである。終戦後は激増した本州人口を受入れて、昭和十九年より同二十六年に至る人口は三万人に達し、大正元年の三倍となつた。二倍より三倍となるに要した年数は僅々七、八年であつたのである。